

教育研究業績書

2018年11月21日

所属：共通教育科

資格：講師

氏名：寺井 朋子

研究分野	研究内容のキーワード
教育心理学	道徳性、規範意識、学校適応、日米比較
学位	最終学歴
博士（臨床教育学）、修士（学術）	武庫川女子大学大学院 臨床教育学研究科 臨床教育学専攻 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

1 教育方法の実践例		
<p>1. 専門科目「教育心理学」における”学修履歴シート”の作成</p>	2018年04月～2018年07月	<p>本授業は心理・社会福祉学科3年生の専門科目（選択）であり、受講生は126名であった。ここでは、初回授業から第15回まで、1枚の「学修履歴シート」に提出物の提出状況や様々な得点を記入していくことにより、学生自身が現在の到達度を認識できる工夫を行った。</p> <p>成績評価方法は、個人提出物4点（2回：2+2）、班提出物18点（2点×9回）、班作業ミニクイズ20点（2回：10+10）、発表会10点、授業内レポート8点、mwu.jpへの自由提出レポート10点（4回：2+2+3+3）、学期末試験30点から成り立っており、非常に複雑であった。このため、各自が自分の現在の得点を把握し、モチベーションを高める方法を考えたことがシート作成のきっかけである。結果的には、特に高得点を目指す意欲の高い学生に好評であった。少数ではあるものの、今後はモチベーションの低い学生に対してもシートを有効に使う工夫が必要であると考えている。</p>
<p>2. 専門科目「教育心理学」におけるmwu.jpを用いた自由提出レポートの活用</p>	2017年04月～2018年07月	<p>2017年度前期、2018年度前期の心理・社会福祉学科3年生の専門科目「教育心理学」（選択）において、mwu.jpを用いて授業外に任意で提出する自由提出レポートを課した。提出締め切りは4回を設定しており提出日はガイダンスで説明した。配点は2・2・3・3点（合計10点分）であった。</p> <p>レポート課題は、キーワードに基づいた書籍を1冊以上必ず調べなければならないというものであった。キーワードと4回分の締切日など、必要な情報はすべてガイダンスで伝え、あくまでも任意であることを強調した。</p> <p>しかし、どちらの年度も半数以上の学生が提出し、4回すべて提出する学生も多く見られた。これらの学生からは、努力が明確に評価される点が良いとの感想が寄せられた。また、大学図書館以外の公立図書館に足を運ぶ学生が増えたこと、授業で扱いきれない幅広い教育問題について興味関心を高めることなどの効果もみられた。</p>
<p>3. 共通教育「心理学入門」における事前課題を活用したアイスブレイク</p>	2015年04月～	<p>この科目は100名定員であり、グループ分けでは、25班に分けて活動することが多い。しかし、共通教育科目であるため、学科も学年も異なる初対面の4人が意見を出し合うことは困難な場合もあり、話し合いやすい雰囲気作りが重要となる。ここではアイスブレイクに事前課題を活用する方法を試みている。</p> <p>まずは、班が作成される1週間前となる初回授業時に、心理学の用語を1つ提示し、それに関連する「単語」を調べてくることを事前課題として伝えた。</p> <p>翌週、くじ引きによって4人×25班を作成したのち、それぞれが調べてきた単語をお互いに発表した。</p> <p>この事前課題の良い点は、①単語を調べるだけでよいので、事前課題へのハードルが低い、②明確な答えがないので、自信がない人も発言しやすい、③単純な問いなので、学年差や事前知識を気にしなくて良い、という3点であるとする。このように、授業開始の間もない時期に、事前課題をグループワークで使用する認識や、班で発言しやすい雰囲気を作ることが、その後の授業につながっていくと考えられる。</p> <p>この課題は、事前課題の単語選定と、クラスでの共有の仕方などに改良を加えながら、現在まで続けている。</p>
<p>4. 共通教育「人間関係の心理学」におけるくじ引きによる座席指定</p>	2014年09月～	<p>この科目は100名定員の科目であり、様々な学科や学年の学生が抽選で履修してくることとなる。その第2回で行う「グループ分け（25班）」はその後の授業へのモチベーションにも関わるため重要なところである。</p> <p>最初にくじ引きを行った2014年9月は、授業開始15分前に教室に到着したが、20名程の学生がすでに着席していたため、座席指定であることを口頭で説明をした。そして、くじと共に班の座席位置表を配布した。最終的に、授業開始3分前にはすべての学生のくじ引きと着席が終了しており、全員が決められた班に着席し、誰も話をしない緊張した状況であった。</p> <p>ここで、ペアワークとグループワークを開始したが、静まり返っていたクラスの雰囲気は驚くほど変化した。</p>

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
5. 多人数でのモラルジレンマ課題を用いた授業実践	2012年02月20日～21日、2013年02月18日	感想アンケートの中には、「私以外の3人が2回生で、3人についていこうと思った」「来週からが楽しみ」という記述も多くあり、学科や学年の違いを好意的に捉えている内容が見受けられた。 このようなくじ引きは、一人で受講する学生も多い共通教育科目では、特に効果が高いと感じられるため、「人間関係の心理学」「心理学入門」の100名定員のクラスで現在も改良を重ねながら実施している。 特別学期の「体験！モラルジレンマ」授業において、さまざまなジレンマ課題を提示して受講生の賛否や意見を聞いてきた。高校生、大学生、保護者、社会人などの年齢の幅が広い受講生がそれぞれの意見を発言しやすくするため、赤色と緑色の3×10cm程度の紙を1人1枚ずつ用意し、それを提示することで、意思表示とした。5人を助けるために1人を犠牲にするトロリージレンマなど、答えのないさまざまなジレンマ課題に対して、色用紙を用いて回答を求め、双方向の授業を展開した（赤色が被許容・緑色が許容など）。 色用紙を使うことで、教員側は賛否の理由を聞く相手をすぐに見つけられる利点があった。また、受講生同士も周囲を見渡ししながら、自分の意見と異なる人が存在することを実感でき、好評であった。
6. 教育心理学（大教職）における教員採用試験問題の活用	2011年04月～2011年07月	教職課程「教育心理学」（教職必修）の受講生（主に大学1年）を対象に、教員採用試験の過去問から抜粋した小テストを複数回実施した。これは、授業の到達度確認の意味もあったが、本授業は複数の学科から主に1年生が受講するため教員採用試験のイメージを早い時期に伝えるという目的でもあった。
2 作成した教科書、教材		
1. 新・プリマーズ 保育の心理学	2013年4月10日刊行	河合優年・中野茂編著（全202頁） 社会性の発達（第7章p.95-107）と対人関係の成り立ちと道徳性（第9章p.122-135）を執筆した。第7章では、乳幼児の養育環境や社会性の発達について記述した。第9章では、道徳性発達の理論について紹介したのち、保育場面でみられる道徳性の萌芽について言及した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 神戸市立小学校のスクールサポーター	2009年4月～2010年3月	5年間に渡り継続してサポーターとなれたことから、子どもの成長や教員との関係性などを長期的に経験することができた。 担任の先生によって指導法や考え方が異なることもあり、その場に合わせた柔軟な姿勢でクラスの生徒に関わることの必要性や、教員同士の連携の重要性を学んだ。また、進行性の難病を抱える子どもと話をしたり、指導が難しい学級の困難さを見るなど、数多くの経験をさせてもらった。
2. 神戸市立小学校のスクールサポーター	2008年4月～2009年3月	週1回～週2回など流動的な活動日数となることもあったが、継続的に関わり続けた。何年も継続してサポーターとして学校へ入っていたため、遠足などの多くの校外活動や5年生のスキー合宿へ同行した年もあった。
3. 神戸市立小学校のスクールサポーター	2007年4月～2008年3月	スクールサポーターの1年目の際に最も多くかかわった1年生と2年生が、すでに3年生と4年生になっており、子どもとの関係性も深まったころである。このころになると、どの学年にも入ったことがあったので、子どもの成長や担任の先生方の考え方などを伺う機会が増えていった。
4. 神戸市立小学校のスクールサポーター	2006年4月～2007年3月	多くの場合で、週1回～週2回ほど、サポートに入っていた。2年目になり、給食の配膳、移動教室、運動会や音楽会の練習に関わることも増えていった。
5. 神戸市立小学校のスクールサポーター	2005年9月～2006年3月	週1回、1年生～6年生及び特別支援学級の授業に入り、担任の先生の指示・希望を受けながらサポートした。主に発達障害児や肢体不自由の子どもたちへの関わりが仕事内容ではあったが、クラス全員に関わるが多かった。算数・国語・体育の時間に入ることが多かったが、音楽・プールなどでもサポートした。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 学校心理士	2018年1月1日～2022年12月31日	第164460号 2013年1月1日取得 2018年1月1日更新
2. 日本心理学諸学会連合 心理学検定1級	2009年10月1日	
3. 日本心理学会認定心理士	2002年04月1日	6012号

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
4. 準中級レクリエーション・インストラクター	2002年04月1日	ID:D50598 有効期限2020年6月30日(2年ごとの更新)
5. 図書館司書	2002年03月21日	No. 平13大 第81号
6. 社会教育主事任用資格	2002年03月21日	平13大 第9号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 臨床発達心理士資格更新研修会「臨床発達心理士としての倫理」講師	2018年06月24日	臨床発達心理士認定運営機構倫理委員会主催の「資格更新研修会 臨床発達心理士としての倫理」を学ぶ研修会において、東北大学で講師として講義とグループワークを行った(13:30-16:30)。
2. 新任教員研修 第9回「能動的な学修への導き方」講師	2018年06月13日	武庫川女子大学の新任教員研修プログラム(水曜2限)において、第9回(6月13日)に「能動的な学修への導き方」のテーマを担当した。グループ分けから始め、1時間半の研修を行った。特に、本学の様子について、私のこれまでの失敗も含めた経験を伝えることを重視した。
3. 能動的学修の教員研究会進行リーダー役	2017年08月25日	全国大学実務教育協会主催の第3回能動的学修の教員研究会において、「テーマ別研究会」と「全体発表及び討議」の進行リーダー役を他大学の先生と共同で行った。
4. 臨床発達心理士資格更新研修会「臨床発達心理士としての倫理」講師	2017年07月30日	臨床発達心理士認定運営機構倫理委員会企画の「臨床発達心理士としての倫理」について、明治学院大学にて13:30~16:30に講義とグループワークを行った。
5. 新任教員研修 第8回「能動的な学修への導き方」講師	2017年06月07日	武庫川女子大学で初めて行われた新任教員研修プログラム(水曜2限)において、第8回(6月7日)に「能動的な学修への導き方」のテーマを担当した。グループ分けから始め、1時間半の研修を行った。
6. 臨床発達心理士「倫理研修会(全国研修会)」講師	2016年07月17日	臨床発達心理士認定運営機構倫理委員会による2016年度第1回「臨床発達心理士としての倫理研修会」(13:30-16:30)において、大阪教育大学で講師として講義とグループワークを行った。
7. 「能動的学修の教員研修リーダー講座」事例紹介講師	2015年08月29日	全国大学実務教育協会主催の第2回「能動的学修の教員研修リーダー講座」において、昨年度講座を受講した1期生の講師として実践事例を発表した。
8. 「教育改善・改革プラン」の提案採択	2015年08月21日	武庫川女子大学「教育改善・改革プラン」の提案募集において、「CA(クラスアシスタント)制度を導入した能動的学修と授業改善」が調査費として採択された。ここでは、同志社大学でのCA制度の授業見学、本学学生との意見交換会、他大学の教員との能動的学修の意見交換会などを行い、報告書を作成した。
9. 新任教員FD研修会「能動的学修とは」講師	2015年07月25日	武庫川女子大学FD推進委員会主催の新任教員FD研修会にて、講師を担当した。13:35~15:05の前半の1時間半では、「能動的学修」に関する話題提供を行った。15:15~16:45の後半の1時間半では、前期授業に関するグループワークを行い、「授業に関するさまざまな問題」について各班で意見をまとめて頂いた。
10. 日本発達心理学会 第74号ニューズレター執筆	2015年02月28日	「いま、研究倫理を問いなおす」という特集号において、「マニュアルの限界—倫理規定に書かれている事項を超えて—」と題して執筆した。ここでは、単に定められたルールを守るだけでは倫理的であるとは言えず、研究者の倫理的感覚の涵養が大切ではないかと論じた。
11. FD「能動的学修の教員研修リーダー講座に関する勉強会」講師	2015年02月20日	武庫川女子大学FD推進委員会主催の「能動的学修に関する勉強会(2月20日16:30~18:30)」で、講師を担当した。ここでは、リーダー講座で学んできたことを学内に還元する目的で、自分が受講した時とほぼ同様の形式で先生方に体験して頂いた。
12. 第1回「能動的学修の教員研修リーダー講座」修了	2014年10月25日	全国大学実務教育協会主催の研修会(8/30、9/27、10/25)に参加し、能動的学修の授業デザインや技法等を学んだ。これらは、事前・事後学修の効果的な方法などを含めて、自らも体験しながら修得する形式であった。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 考える道徳を創る 小学校 新モラルジレンマ教材と授業展開	共	2017年02月	明治図書	荒木紀幸編著(全150頁) 本書は小学校の道徳の授業で使用できるモラルジレンマ教材と授業展開を示している。モラルジレンマ授業の基本形は共通理解、第1次判断、自己の考えの明確化などを経て児童の議論を促し、再度、道徳判断を求めるものである。 執筆した「ガーベラの折り紙(P.84-89)」は小学3

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2. 新・プリマーズ 保育の心理学	共	2013年04月	ミネルヴァ書房	<p>～6年生対象の教材であり、2時間扱いの授業展開と指導上の留意点などを記載した。誠実さが不誠実に受け取られることもあることを葛藤材料とした。</p> <p>河合優年・中野茂編著（全202頁） 社会性の発達（第7章p. 95-107）と対人関係の成り立ちと道徳性（第9章p. 122-135）を執筆した。第7章では、乳幼児の養育環境や社会性の発達について記述した。第9章では、道徳性発達の理論について紹介したのち、保育場面でみられる道徳性の萌芽について言及した。（「作成した教科書」の欄に既出）</p>
2 学位論文				
1. 非道徳的行動における直感的な制御機能の検討	単	2009年03月	武庫川女子大学大学院 臨床教育学研究科 臨床教育学専攻 博士論文	<p>これまでの心理学における道徳性研究は、認知的側面、行動的側面、情緒的側面の3側面から研究されているとするものが多い。しかし、社会的直観者モデルが提唱され、これまでの道徳性心理学が道徳的推論に過度に依存してきたと主張されているが、直観が最初に生じるという考えには異論も多い。</p> <p>本論文の目的は、直観と判断の順序を問わない仮説的モデルをもとに、日常生活のさまざまな非道徳的行動に対する「悪いかどうかの判断」と「するかどうかの行動」の差異から、直感的な制御機能の働きを検討することであった。</p> <p>最終的には、非道徳的行動の抑制メカニズムにおける抑制要因が、判断の階層が最も低く論理性が低い生物学的直感から、最も論理的である形式的操作への順番で獲得されていく過程であることを提案した。</p>
2. 映画やドラマにみられる子どもの表情—表示規則を中心として—	単	2004年03月	神戸大学大学院 総合人間科学研究科 コミュニケーション学専攻 修士論文	<p>子どもは思ったことをストレートに表出するが、大人は表示規則に即した表出を行う。本研究の目的は、子どもの表情表出の特徴を分析するとともに、表示規則の使用についても検討することであった。</p> <p>ここでは映画とドラマを用い、FACS (Facial Action Coding System) によってAU (Action Unit) を明確にしていっていった。</p> <p>本研究では、子どもは基本表情そのものは少なかったが、日本人特有や日本人の子ども特有の表情がみられることが明らかとなった。このような子ども特有の表情が次第に文化に応じた表示規則に従った表情になっていくと考えられる。それは自然に変化することもあれば、子どもを持つ母親らへの実験からも明らかのように「このような表情はしてはいけない」などと親が子どもに伝え、強制的にある表情をやめさせたり、その場にふさわしい表情を教える可能性もあることが明らかになった。</p>
3 学術論文				
1. 児童生徒の心理的状态把握とその追跡の方法に関する研究—9大学連携協働研究「子どもみんなプロジェクト」の西宮市における取り組み—	共	2017年03月	臨床教育学研究（武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科）	<p>河合優年・高井弘弥・寺井朋子・佐々木恵・坂田智美・大和一哉・谷口麻衣・星川雅敏・加瀬頼子・河合純孝</p> <p>本論文では、西宮市と共同で行っている追跡調査の取り組み状況について説明した。特にここでは、小学校1年生から中学校3年生まで個人を追跡することの意義を述べた。また、個人名を匿名化してID管理する手順や、転出・転入の際のデータ分析方法の課題などを明らかにした。第23巻p. 1-11.（共同研究のため抽出不可能）</p>
2. 学校現場における教師と生徒のより良い関係性について	単	2016年03月	臨床教育学研究（武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科）	<p>平成26～27年度特別研究「学校現場における教師と生徒の良好な関係に必要な道徳的な直感に関する研究」の報告であった。研究は大きく2つに分かれており、研究1は教職志望の男女大学生に対するアンケート調査であり、研究2は現職の小中学校教員へのインタビュー調査であった。第22巻p. 79-87. 研究ノート。</p>
3. 中学生の命の大切さに対する意識変容についての一考察—モンシロチョウの飼育や植物栽培を通して—（査読付き）	共	2015年03月	道徳性発達実践研究（日本道徳性発達実践学会）	<p>関谷善行・寺井朋子</p> <p>本研究は、中学校の現職理科教員と共同で行われた。ここでは、中学生が昆虫飼育や植物栽培をすることによって、命の大切さへの意識が変容するかどうかを調べた。中学2年・3年生をクラスごとに、統制群・モンシロチョウ飼育・ミニトマト栽培・ペチュニア栽培群に分け、事前事後の意識変容を質問紙調査により確認した。その結果、最も「いのち」の成長を感じられたはずのモンシロチョウ飼育群においてのみ命の大切さに関する得点が減少した。これは、卵から成虫へ成長する喜び以上に、中学生が負担を感じたためではないかと推測された。</p> <p>さまざまな「いのち」に関する実践が行われているが、あるところで成功した事例がそのまま他で成功するとは限らず、年齢（小学生と中学生など）や状況（都会かどうか。虫や動物に慣れているかどうか）</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
4. ある公立中学校におけるミュージカル創作に対する考察—学力に関わらず全員が輝ける場を目指して— (査読付き)	共	2014年02月	道徳性発達研究 (日本道徳性発達実践学会)	<p>など。) に適した方法の重要性が改めて明らかにされた。第9巻第1巻 p. 38-43. (共同研究のため抽出不可能)</p> <p>寺井朋子・竹田敏彦 本研究では、「総合的な学習の時間」において長期的に地域と連携してなされたある公立中学校の1年生全員によるミュージカル創作が、特に学力の低い生徒に対してどのような影響を与えたのかを検討した。5月はミュージカルへの不安や意欲を尋ね、11月は公演終了時の達成感や創作中の気持ちについて尋ねる質問紙を用いた。 学力に関して、春に実施された業者テストの国語・社会・数学・理科の4教科の平均偏差値を算出し、40未満群・40～50群・50～60群・60以上群の4つの群を作成した。学力別に5月時点の意欲や11月時点の達成感の得点を調べたところ、どちらの時点でも40未満群が特に低いということはなく、むしろ学力が低い群の方が「最初からやる気があった」傾向がみられた。全体として、ミュージカル創作は40未満群も他の生徒と一緒に達成感を感じられた貴重な経験であったと推察された。第8巻第1号 p. 19-27. (共同研究のため抽出不可能)</p>
5. 保育士の支援に関する実践的取り組み—「保育士のための元気アップ勉強会」の内容と評価— (査読付き)	共	2013年03月	臨床教育学研究 (武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科)	<p>倉石哲也・寺井朋子・橋詰啓子 保育の現状や課題をふまえて、筆者らは保育士のための勉強会を実施した。企画段階では、保育士の興味などを調べる事前調査を行った。勉強会は当初予定されていた3回では希望者が全員受講できなかったため、4回実施した。その際に、参加者に対して属性や興味関心などを尋ねる質問紙調査への記入を依頼し、保育士が直面している課題などを分析した。第19巻 p. 43-61. (共同研究のため抽出不可能)</p>
6. 社会人大学院生の大学院への期待と学びの環境 (査読付き)	共	2012年03月	臨床教育学研究 (武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科)	<p>橋詰啓子・寺井朋子 23人の大学院生に対して質問紙調査を行った。これらの23人は、夜間に開講している武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科在籍の、主として社会人学生で、年齢は22歳～61歳であった。分析の結果、大学院への期待が高いほど人間関係の拡大や自分自身の変化を期待していることが示された。また、働きながら通学している大学院生は学業と職場と家庭の両立において複雑な課題を抱えていることも示唆された。第18巻 p. 21-30. (共同研究のため抽出不可能)</p>
7. 女子大学生における大学入学動機と入学後の不安に関する考察 (査読付き)	単	2012年03月	臨床教育学研究 (武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科)	<p>大学生を対象として、大学入学動機と入学後の不安に関する質問紙調査を行った。その結果、入学動機については教養的動機、雰囲気的動機、将来展望的動機の3因子が得られ、入学後の不安については友人関係への不安、学業面への不安、学外環境への不安の3因子が得られた。将来展望動機の得点が高い学生の方が低い学生より、友人関係と学業に対して不安を感じていた。第18巻 p. 31-37</p>
8. 小学生児童と保護者における非道徳的行動に対する善悪判断とそれに影響する感覚的要因の検討 (査読付き)	単	2010年12月	家庭教育研究所紀要 (小平記念日立教育振興財団日立家庭教育研究所)	<p>小学3年生～6年生とその保護者に対して、非道徳的行動の判断に影響する要因を検討した。まず、非道徳的行動を分類した結果、「社会的不適切行動」と「人間的不適切行動」の2つに分かれた。そして、すべての学年の子どもと保護者が人間的不適切行動の方が悪いと判断していた。また、どちらの行動に対しても、厳格性が影響する傾向が強かった。第32巻2号 p. 83-91.</p>
9. Relationships between Confidence and Morality in Elementary School Pupils	単	2009年10月	武庫川女子大学臨床教育学研究科研究誌	<p>小学生児童を対象とした調査において、「自分が努力すれば状況は変わる」と考えることができる児童(LOC高群)の方が、適切な道徳的判断ができ、社会的な連帯感もより感じていることが明らかとなった。児童が自信をもって生活できるようにサポートすることが道徳性発達にも意味があることが示唆された。第15巻 p. 193-197.</p>
10. ルールが明確ではない非道徳的行動の分類とその抑制要因 (査読付き)	単	2009年03月	応用教育心理学研究 (日本応用教育心理学会)	<p>ルールや罰則が明確ではないが一般的に良くないとされている行動(非道徳的行動)を抑制する要因について検討した。大学生を対象とした調査1と調査2より、「人として良くない行動」に対する不快感には男女共に社会的連帯感が影響しており、「社会的に良くない行動」に対する不快感には男性は他者視点と連帯感、女性は抑制力が影響を及ぼしていることが明らかとなった。第25巻2号 p. 3-11.</p>
11. Haidtの社会的直観者モデルについての一考察—モデルが道徳性研究に与える影響とこれからの道徳性研究の方向性— (査読付き)	単	2009年02月	モラロジー研究 (財団法人モラロジー研究所)	<p>Haidt (2001) が主張する社会的直観者モデルについて、その賛成論と反対論を概観した。このモデルが批判される理由は、「直観が善悪判断の前に生じる」とするからであるが、道徳的行動や非道徳的行動においては論理的判断だけではなく感情も関わると</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
12. 明確なルールがない「良くない」行動における善悪判断と不快感情と実際の行動との関係（ピアレフリー）	単	2006年07月	日本道徳性心理学研究（日本道徳性心理学研究会）	<p>いう主張に対しては同意がなされていることを示した。また、Greeneら(2001)のfMRIを用いた道徳性研究や列車ジレンマの研究についても紹介し、今後の道徳性研究の方向性について考察した。第63巻 p. 109-124.</p> <p>明確なルールはないが良くない行動について、「善悪判断」と「不快感情」及び「実際の行動の可能性」の関係を女子大学生への質問紙調査から検討した。その結果、「悪くも不快でもないが実際にはしない行動」が得られた。それは女性の身だしなみや年長者への態度など、日本の古典的なルールとも言えるものであった。第20巻p. 7-15.</p>
13. 子どもの表情表出と表示規則の獲得に関する研究について	単	2004年03月	神戸大学国際文化学部・神戸大学総合人間科学研究所鶴山論叢刊行会発行、鶴山論叢	<p>子どもの表情表出と表示規則に関する文献をレビューした。ここではまず、子どもの表情に関する研究方法が観察によるものと仮想場面を用いるものに大別されることを示した。両者の特徴をまとめた上で、子どもの表情に関する新たな研究方法として映画やビデオなどの表情を用いる研究の可能性について論じた。第4巻 p. 84-92.</p>
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. How Teacher's Involvement Correlate to a Student's School Adaptation: Focused on Differences and Similarities in American and Japanese Schools.	共	2018年09月16日	The 30th Japan-U.S. Teacher Education Consortium(JUSTEC)	<p>Terai Tomoko, Takai Hiromi, Vincent C. Alfonso, John Traynor, & Kawai Masatoshi 佛教大学（京都）にて、口頭発表(presentation 14)を行った。 アメリカのスポケーンで実施されたHYS(Healthy Youth Survey)から選択した項目を日本の公立中学校1校で実施した比較結果について、ゴンザガ大学と共同発表した。日米の子どもの回答の大きな違いは、朝食やアルコール摂取経験などの健康面は日本の子どものほうが良く、論理的な主張や大人への質問はアメリカの子どものほうが高かった。（共同研究のため抽出不可能）</p>
2. 小学校高学年の学級内適応と心理的特性の関係について—短期縦断研究による適応に問題があると考えられる児童の特徴について—	共	2018年03月28日	日本発達心理学会第29回大会	<p>河合優年・寺井朋子・高井弘弥・大和一哉 東北大学（宮城）にて、ポスター発表(発表論文集 P. 348)を行った。 Q-Uテストによって示される、学級内での承認と被侵害の得点を、学級適応状態の外的な指標として、これらチェック項目の視点（有能性・資源・脆弱性・学校のルール順守）が適応状態と関連しているかの検討結果について議論した。（共同研究のため抽出不可能）</p>
3. Short-term Longitudinal Study on School Adaptation in Japanese Elementary and Junior High Schools -Focus on the Social and Deliberative Skills-	共	2017年09月16日	The 29th Japan-U.S. Teacher Education Consortium(JUSTEC)	<p>Terai Tomoko, Takai Hiromi, Vincent C. Alfonso, John Traynor, Jon Sunderland, & Kawai Masatoshi University of Hawai'i at Manoa(America)にてポスター発表(Poster Presentation 9, p.66)を行った。 日本の小中学校の5年間の縦断的データを用いた。長期的不適応児が長期的適応児よりも社会的スキルなどが低いことを示した。これらの結果の因果関係は明確ではないものの、長期的不適応児が様々な社会的相互作用を多く経験できるように、周囲の大人のサポートが重要であることを示した。（共同研究のため抽出不可能）</p>
4. 専門職としての保育士に関する研究④—保育士の人材と新制度に対する意識—	共	2017年05月20日	日本保育学会第70回大会	<p>橋詰啓子・寺井朋子・倉石哲也・石川道子 川崎医療福祉大学（岡山）にて、ポスター発表(P-A-4 掲示番号8番)を行った。 保育所施設長を対象として、保育士人材の実態、新制度に関する意見についてはがき調査を行った。新制度については、制度の意義や内容が不十分に理解されており、疑問を持ちながら実施している状態が示されていた。保育士の人材については、現状として3分の1の施設で充足していない状態が明らかとなり、保育士の人数だけでなく、人材の質の確保や育成が難しい実態もわかった。処遇改善はもちろんだが、保育という仕事のやりがいやをどのように示していくかが重要であることが示された。（共同研究のため抽出不可能）</p>
5. 専門職としての保育士に関する研究⑤—保育の葛藤場面に対する大学生の倫理観—	共	2017年05月20日	日本保育学会第70回大会	<p>寺井朋子・橋詰啓子・石川道子・倉石哲也 川崎医療福祉大学（岡山）にてポスター発表(P-A-4 掲示番号9番)を行った。 これまでの共同研究により、現職保育士よりも保育士志望の大学生の方が、子どもの安全より保護者との約束を重視し、子どもに正直に話すことよりも保護者や同僚との秩序を重視する傾向がみられてい</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
6. Short-term Longitudinal Study in Japanese Elementary and Junior High Schools Regarding School Adaptation -Is There Any Sign before Being Maladjusted?-	共	2016年11月06日	The 28th Japan-U.S. Teacher Education Consortium(JUSTEC)	た。本研究では就職先志望が明確である学生とそうではない学生の葛藤場面に対する回答から、大学生の倫理観を調べた。志望意欲の高い学生は、自分の立場を考え保護者寄りの回答となったが、志望意欲の低い学生は、自分ができるか否かに関わらず、理想と思われる回答をしたと考えられる。(共同研究のため抽出不可能) Terai Tomoko, Takai Hiromi, Vincent C. Alfonso, John Traynor, Jon Sunderland, & Kawai Masatoshi 愛媛大学(愛媛)にて口頭発表(Presentation 16, p. 41)を行った。 2012年～2015年の春・冬に小中学生に行ったQ-Uの結果について、学校不適應になる前の兆候について検討した。その結果、学校不適應になる前には、被侵害得点・承認得点が大幅に変動する可能性が明らかになった。その変動は被侵害が減少する、承認が増加するという、一見して「良い」変動も含まれていた。このような「良い」変動であっても、周囲の大人は長期的に子どもを見守る必要があると論じた。(共同研究のため抽出不可能)
7. 中学生の学校適応と認知力・安心感の関係-Q-Uの得点をもとに-	単	2016年10月08日	日本教育心理学会第58回総会	香川大学(香川)にて、ポスター発表(ポスターPC73)を行った。 Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)の承認・被侵害得点と、その他の得点の関連を検討し、学校適応に関する基礎的資料とすることを目的とした。中国地方の公立中学校にて質問紙調査を実施したところ、不満足群の認知力においては他の群と得点の差はなく、社会的解釈は満足群とほぼ同じ値であった。一方、安心感では大きな差があり、原因-結果は明らかではないが、不満足群の生徒は人に対して不信感を持っている様子が見られた。
8. 施設長が求める保育士の資質	共	2016年05月07日	日本保育学会第69回大会	橋詰啓子・寺井朋子・石川道子 東京学芸大学(東京)にて、ポスター発表(ID22046)を行った。 現職保育士113名にアンケート調査を行った。その結果、経験年数が長い保育士ほどストレスを強く感じているが、自身の専門性を向上させようとする意欲が高いことが明らかとなった。今後、誇りを維持できる環境整備がますます重要になっていくと考えられる。(共同研究のため抽出不可能)
9. Short Term Longitudinal Study of Changing Patterns of Self-Reported Bullying/Approval Score of Children from Elementary to Middle School:	共	2015年09月15日	The 27th Japan-U.S. Teacher Education Consortium(JUSTEC)	Terai Tomoko, Takai Hiromi, Vincent C. Alfonso, Jon Sunderland, John Traynor, & Kawai Masatoshi University of West Florida(America)にて口頭発表(Presentation 3, p. 23)を行った。 ここでは2年間に渡って得られた小中学生のアンケート結果について、学校適応と学習意欲の関係を中心に発表した。その結果、小学1年～中学2年までの全学年において、学校適応と学習意欲は同時点(201X年春時点)では相関がみられた。 しかし、特に小学1・2年生において、そののち(半年後・2年後)の学習意欲との相関がみられなくなった。このため、特に小さな子どもでは入学直後の学校適応が、のちの学習までそれほど関係しないと考えられる。(共同研究のため抽出不可能)
10. 学校から中学校への移行期における学級内での児童・生徒の関係性の変化-Q-Uを用いたクラス内関係性の分析-	共	2015年08月26日	日本教育心理学会第57回総会	河合優年・寺井朋子・高井弘弥 新潟大学(新潟 朱鷺メッセ)にて、ポスター発表(発表論文集P.195 ポスターPB003)を行った。 同じ構成員からなる小中連携学校では、小学校時代の良好な友人関係が、中学での新たな学習環境への適応と関係すると考えられるため、本研究では、小学校入学時点から中学3年生までの学級内の関係性を縦断的に追跡している研究の中から、小学校から中学校への移行期を含む2学年についての2年間のデータを比較し、学年集団の特徴が中学校にも持ち越されるのかどうかを検討した。(共同研究のため抽出不可能)
11. 発達障害事例の親子による後方視的語りの検討	共	2015年07月05日	日本発達障害学会第50回研究大会	石川道子・橋詰啓子・寺井朋子 東京学芸大学(東京)にて、ポスター発表(P4-09)を行った。 現在、青年となっている自閉症スペクトラム障害の事例について、本人と両親に対してそれぞれ幼少時からの育ちについて後方視的に語ってもらう半構造化面接を実施し、得られた結果を分析した。1事例について、両親と本人の継続的な経過を聴取することによって、当事者と家族の認識の違いが明確となった。(共同研究のため抽出不可能)
12. 専門職としての保育士に関する研究① 保育士の職務満足度	共	2015年05月09日	日本保育学会第68回大会	橋詰啓子・寺井朋子・倉石哲也・石川道子 福山女学院学園(愛知)にてポスター発表(ID21003)を行った。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
13. 専門職としての保育士に関する研究② 保育士の倫理観	共	2015年05月09日	日本保育学会第68回大会	<p>本研究は、保育士が専門性をどのように考え、仕事への満足度を持っているのかを調査し、長期で働く保育士には何が必要かについて考察した。現職保育士に質問紙調査を行った結果、経験年数が長い保育士ほどストレスを強く感じているが、自身の専門性を向上させようという意欲が高かった。今後、保育士が長期で働き続けるためには、専門性の高い職業としての誇りを維持できる環境を整備し、専門性を向上させていく研修や学習の機会を十分に提供できるよう支援していくことが重要である。(共同研究のため抽出不可能)</p> <p>寺井朋子・橋詰啓子・石川道子・倉石哲也 椋山女学園大学(愛知)にてポスター発表(ID20114)を行った。 保育場面における葛藤場面を用い、保育士と大学生がどのように判断するのか、そこに違いがあるのかどうかを調べた。現職保育士、保育士養成課程在学中の女子大学生に質問紙調査を行った結果、経験が浅いほうが子どもの安全より保護者との約束を重視し、子どもに正直に話すことよりも保護者や同僚との秩序を重視することが示唆された。経験者は保護者と子どもの両方の要求を調整でき、保護者よりも子どもを優先した判断を行ったとしても保護者に説明できると考えているのかもしれない。(共同研究のため抽出不可能)</p>
14. 障害児保育に対する保育士の困難感に関する研究	共	2014年11月	日本教育心理学会第56回大会	<p>寺井朋子・橋詰啓子・倉石哲也・石川道子 神戸大学(兵庫 神戸国際会議場)にてポスター発表(ポスター-PB050)を行った。 保育士が障害児保育をする中で、どのようなことに困難を感じているのかについて、現状を整理することを目的とし、質問紙調査を行った。その結果、「対象児への対応の困難さ」において若手が障害児への対応に特に困難を感じていることが明らかとなった。若手は日々の保育にも慣れておらず、経験や知識が不十分なため障害児への個別対応に不安を感じている。障害児保育については、人数的な加配対応だけではなく、経験が浅い保育士への研修やサポート体制が必要であると考えられる。(共同研究のため抽出不可能)</p>
15. A Cross Cultural Comparison of Japanese and American Elementary and Middle-School Children's Attitudes and Behaviors toward Academic and Social Issues 2 -From the Results of Japanese Students' Short Term Longitudinal study-	共	2014年09月19日	The 26th Japan-U.S. Teacher Education Consortium(JUSTEC)	<p>Kawai Masatoshi, Jon Sunderland, John Traynor, Takai Hiromi, Terai Tomoko 東京学芸大学(東京)にて口頭発表(Presentation 1, p.22)を行った。 昨年に引き続き、武庫川女子大学とゴンザガ大学の共同研究の発表として、それぞれの現状報告を行った。日本の結果として小学1年生から中学3年生まで2年間4回分の縦断的データの分析結果について、口頭発表(10:00~10:30)を行った。(共同研究のため抽出不可能)</p>
16. ある公立中学校におけるミュージカル創作に対する考察	共	2014年08月17日	第14回SAME(School and Moral Education:学校と道徳教育)研究会	<p>寺井朋子・林明弘(演出家・脚本家)・竹田敏彦(広島国際大学) 広島大学(広島)にて、口頭発表(15:00~15:40)を行った。 広島県内の公立中学校において、総合的な学習の時間を用いてミュージカル創作が行われた内容について共同で発表した。これは、1年生全員が参加し、キャスト、合唱、舞台芸術、衣装、広報などの役割を担ったものであった。地域住民や教員も参加し、プロの声楽家と演出家による指導を中学生と一緒に受けながら、半年以上練習を重ねて、地域の大ホールで披露することとなる。 この際に中学生に行った事前事後にアンケート調査から、達成感や責任感、地域の大人や先生との関わり方が変わったことを示した。(共同研究のため抽出不可能)</p>
17. ミュージカル創作への生徒の達成感と学力の関係ーある公立中学校の挑戦ー	共	2013年12月01日	日本道徳性発達実践学会第13回香川大会(第31回道徳性発達研究会)	<p>寺井朋子・竹田敏彦 香川大学(香川)において、口頭発表(第3部会8:50-9:15)を行った(大会要項・発表論文集P.36-37)。 本研究では、「言葉の力」と「体験の力」によって「響き合う力」を育むことを目的として、8か月にわたり地域と連携してなされたある公立中学校のミュージカル創作が生徒にどのような影響を与えたのか考察した。特に学力の低い生徒が達成感や充実感を味わうことは、他の生徒よりも大きな意味を持つと考えられるため、ここでは学力の低い生徒に焦点を当てた。学力の低い生徒たちは、「全員が初めて」でありそれまでの学力にあまり関係のないことなどから学力の高い生徒と同等の意欲や達成感を感じていた。また、よい影響は大人から一方的に与えら</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
18. 中学生における日常生活の安定感と善悪判断の関係	単	2013年08月	日本教育心理学会第55回大会	<p>れるものではなく、生徒同士で相互に与えあっていたと考えられる。(共同研究のため抽出不可能)</p> <p>法政大学(東京)にて、ポスター発表(ポスターP C-090)を行った。</p> <p>本研究では将来的な非行を防ぐという観点から、中学生の日常生活の“安定感”と日常的な非道徳的行動に対する善悪判断の関係を調べることとし、日常生活の安定感について学校生活と家庭生活に分けて検討した。公立中学校1校の1年生～3年生の全校生徒に対して、2012年の春と冬に質問紙調査を実施した。学校や家庭生活が安定している生徒の方が厳格に善悪判断をしていること、家庭生活安定感が人として良くない行動への判断と関連があることが示唆された。</p>
19. A comparison of Japanese and American elementary and middle school students' perceptions of academic and social issues.	共	2013年06月	37th Annual Pacific Consortium Conference : Sharing Perspective - International Conventions about Education: Recurrings Themes in PCC.	<p>Jon Sunderland, Kawai Masatoshi, John Traynor, Takai Hiromi, & Terai Tomoko Hawaii's Imin International Conference Center : University of Hawaii' i at Manoaにて、口頭発表を行った。</p>
20. A Cross Cultural Comparison of Japanese and American Elementary and Middle-School Children's Attitudes and Behaviors Toward Academic and Social Issues	共	2013年05月31日	The 25th Japan-U.S. Teacher Education Consortium(JUSTEC)	<p>Kawai Masatoshi, John Traynor, Takai Hiromi, Terai Tomoko, & Jon Sunderland University of Puget Sound(America)にて口頭発表を行った(Presentation10, p.21)。</p> <p>武庫川女子大学とゴンザガ大学の共同研究の最初の発表として、それぞれの現状報告を行った。武庫川女子大学からの報告では、西宮市で行われている小中学生へのQ-U調査について、小学1年生から中学3年生までの承認と被侵害得点の変化について口頭発表(15:15～15:45)を行った。(共同研究のため抽出不可能)</p>
21. 道徳的アイデンティティと非道徳的行動に対する善悪判断の関係	共	2013年05月	日本感情心理学会第21回大会	<p>寺井朋子・高井弘弥 東北大学(宮城)にて、ポスター発表(ポスターP04)を行った。</p> <p>大学生に質問紙を実施し、親しみやすさや公平性などをどの程度重視しているかについて尋ねた道徳的アイデンティティ項目(親しみやすさ・公平・寛容・勤勉・責任感)と、身近な非道徳的行動に対して尋ねた善悪判断について分析を行った。日本人にとっての公平は他の種類とは異なる意味を持っていたとも考えられる。また、人間性不適切と非援助のみに相関がみられたため、道徳的アイデンティティと関連する善悪判断とそうではない判断があることが示唆された。(共同研究のため抽出不可能)</p>
22. 善悪判断における直感の役割に関する予備的研究	単	2012年09月	日本心理学会第76回大会	<p>専修大学(東京)にて、ポスター発表を行った。</p> <p>道徳的な判断時における直感の役割を検討する基礎的研究として、論理力と直感力の程度を測定する質問紙を作成し、論理と直感という2つの力の程度が善悪判断とどのように関連しているのか検討した。中学生に質問紙調査を実施した結果、本研究で用いた項目の妥当性についてはさらなる検討が必要であるが、少なくともルールの参照や理由づけなどの論理的な力のほかに何らかの力が善悪判断に影響を及ぼしていることが示唆された。</p>
23. 子どもの学習・生活態度と保護者の関わり方ー子どもに厳しい親は自分にも厳格であるのかー	共	2012年03月	日本発達心理学会第23回大会	<p>寺井朋子・税所涼子 名古屋大学(愛知)にて、ポスター発表(ポスターP2-23)を行った。</p> <p>本研究では、小学生の保護者が学習や生活面において子どもに勧めていることと、保護者自身が心がけていることとの関係を調べた。特に、子どもに対して様々なことを強く勧めている親は、自分自身の生活や子どもとの関わり方においても心がけが強いのかということを検討した。公立小学校1校の3年生～6年生までの児童と保護者に質問紙調査を実施した結果、子どもの学習に対して保護者自身が力を入れる程度が強いほど、子どもとの会話や外部との関わりへの心がけが下がることを示された。子どもの学習について保護者が自分自身だけで心がけているとも考えられる。(共同研究のため抽出不可能)</p>
24. 小学生に身近な非道徳的行動における善悪判断～横断的検討と縦断的検討～	単	2011年10月	日本こども学会第8回大会	<p>武庫川女子大学(兵庫)にて、ポスター発表を行った。</p> <p>児童が身近な非道徳的行動をどのように善悪判断するのかについて、横断的・縦断的に分析することを目的とした。用いられた項目は、予備調査で5因子(迷惑行為、行儀の悪さ、年長者不敬、非援助、陰での行為)に分けられていた。行儀の悪さと年長者不敬という保護者や教師が直接関わる行動の得点が横断的・縦断的に低下しているため、モラル低下が</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
25. 日常的な非道徳的行動に対する児童と保護者の善悪判断—保護者との関係に注目して—	単	2011年07月31日	日本道徳性発達実践学会第11回神戸親和大会（第28回道徳性発達研究会）	より意識されやすい状態であると考えられる。 神戸親和女子大学（兵庫）にて、口頭発表（研究発表④11：30-12：00）を行った（研究大会論文集P.40-41）。 本研究では小学生児童と保護者に質問紙調査を行った。児童には身近な非道徳的行動に対してどの程度悪いと思うかという善悪判断を尋ね、保護者には自分の子どもがしたとすればどの程度悪いと感じるかという善悪判断を尋ねた。その結果、学習面や生活習慣面などで児童への関わりの心がけ得点が高い保護者ほど児童が非道徳的行動をした場合は悪いと判断していた。しかし、最も関わりが多い保護者の児童では、保護者の関わりと児童の善悪判断に負の相関がみられ、保護者が関われば関わるほど児童の善悪判断が高まるということではないことが示された。
26. 日常的な非道徳的行動に対する善悪判断の分類—小学生児童とその保護者に対する質問紙調査より—	単	2011年03月	日本発達心理学会第22回大会	東京学芸大学（東京）にて、ポスター発表（ポスターP1-052）を行った。 本研究では、身近な非道徳的行動においても意図的な論理的推論による判断がなされる行動と、感覚的に判断がなされる行動があるのかどうかを検討した。関西圏の公立小学校1校の3年生～6年生とその保護者を対象に質問紙調査を行った結果、子どもも保護者も社会的不適切行動よりも人間的不適切行動を行うほうが、より「悪い」と判断することが分かった。従って、学年や年齢に関わらず同じ傾向になったため、子どもでも非道徳的行動を無意識的に区別していることが示唆された。
27. 道徳性発達の最前線を知る—Part 3	共	2011年03月	日本発達心理学会第22回大会	ラウンドテーブル（RT2-1）に話題提供者として参加した。 企画：「道徳性・向社会性」分科会，司会・話題提供者：二宮克美（愛知学院大学，話題提供者：長谷川真理（横浜市立大学） 寺井朋子（武庫川女子大学） 越中康治（宮城教育大学）
28. 小学生の規範意識に関する研究～同一小学校における2年前との比較～	単	2010年09月21日	日本心理学会第75回大会	大阪大学（大阪）にて、ポスター発表（教育2AM059、発表論文集P.1214）を行った。 学年があがるにつれてどのような規範意識が低下するのかを検証するために、小学生の規範意識の変化を横断的・縦断的に検討した。小学1～6年生に質問紙を実施したところ、文化や社会に依存するマナー的な規範の違反は許容するものの、他者への迷惑行為等は許容しないというように、規範の種類により判断を変化させる可能性が考えられる。
29. 小学生における非道徳的行動の善悪判断に影響する要因の検討	単	2010年03月27日	日本発達心理学会第21回大会	神戸国際会議場（兵庫）にて、ポスター発表（P4-051、論文集P.404）を行った。 本研究では、非道徳的行動に対する善悪判断に対して、「厳格性」と「自己基準」の2つが善悪判断にどのような影響を与えているのかを検討することを目的とし、小学1～6年生に質問紙調査を実施した。1年生では外的な要因によって善悪判断を行うことが示唆された。また、厳格性と自己基準が、高学年では向社会的行動の不実行への判断、低学年では陰での行為への判断に影響を与えており、年齢によって内的に制御される事柄が異なることが示唆された。
30. 小学生における非道徳的行動に対する善悪判断と日常生活意識との関係	単	2009年09月22日	日本教育心理学会第51回大会	静岡大学（静岡）にて、ポスター発表（PF012、発表論文集P.525）を行った。 小学生児童における生活習慣と学力（国語・算数）の得点関係を調べるために、学力・日常生活調査を行った。学力指標と生活習慣のそれぞれの項目ではほとんど有意な関係はみられなかったが、学力指標と塾の日数については3、4年生のみ相関がみられた。高学年になると塾の日数と学力の得点の結びつきが強くなると予想したが、そうとは言えない結果となった。
31. 小学生における自己への自信と道徳的判断の関係	単	2009年08月28日	日本心理学会第73回大会	立命館大学（京都）にて、ポスター発表（発達3AM149、発表論文集P.1199）を行った。 本研究では、道徳的直観について検討する一部として「自分が努力すれば状況が変わる」という自信と道徳性との関係について検討した。小学1～6年生に質問紙調査を行った結果、努力すれば状況は変わるという自信が高い児童のほうが非道徳的行動に対し適切な判断と行動を行うことが示唆された。また、この自信を失ったときに道徳的な基準まで失う可能性も示唆され、道徳性向上のためには一人ひとりの子どもが自分自身に自信を持って生活が送れるような手助けが必要だと考えられる。
32. 非道徳的行動に対する善悪判断と実行可能性との関係—小学生に対	単	2009年03月24日	日本発達心理学会第20回大会	日本女子大学（東京）にてポスター発表（P5-038、論文集P.440）を行った。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
する調査よりー				小学生児童において、非道徳的行動に対する善悪判断と、「したいと思ったら行うかどうか」の実行可能性の関係を検討した。小学1～6年生に2種類の質問紙を行った結果、「悪いと判断される程度よりも実行されやすい行動」と、「悪いと判断される程度よりも実行されにくい行動」があると言え、行動の種類によって善悪判断が制御に及ぼす影響が異なること示唆された。
33. 幼稚園における食育のあり方に関する研究-IV	共	2008年10月	教育心理学会第50回大会	西元直美・河合優年・寺井朋子・山本正顕・杉本五十洋・永迫千代乃 東京学芸大学（東京）にて、ポスター発表（ポスターPA1-13）を行った。 保育園・幼稚園の保育者12名とそこに子どもが通っている養育者59名に、食育に関する自由記述の調査票を配布した。その結果、園でも家庭でも食育の重要性は認識されていたが、園と家庭をつなぐパスが明確ではないことが明らかとなった。（共同研究のため抽出不可能）
34. 非道徳的行動に対する直感的な制御についてー自罰的傾向からの検討ー	単	2008年03月20日	日本発達心理学会第19回大会	追手門学院大学（大阪）にて、ポスター発表（PB142、論文集P.548）を行った。 社会的場面で行動を直感的に制御する機能があると考え、その制御機能の役割を検討した。この研究では非道徳的行動に限定し、仮説的におかれた直感的制御機能と善悪判断と行動の関係を調べた。その結果からは、公共的迷惑行為と行儀の悪さについては、「悪いことと判断する」得点よりも「実行する」得点が高いことが明らかとなった。
35. 幼稚園における食育のあり方に関する研究 - III -	共	2007年9月15日	日本教育心理学会第49回総会	西元直美・河合優年・中村清美・寺井朋子・山本正顕・沼田宙・永迫千代乃・杉本五十洋 文教大学（埼玉）にて、ポスター発表（ポスターPB007、論文集P.111）を行った。 本研究では、養育者の食育の捉え方についての枠組みを探り、養育者と保育者の食育の捉え方の枠組みとの対比を通して食育のあり方を考察した。両者の枠組みには集団教育と家庭教育での差異が考えられ、それぞれの場所における食育の捉え方が異なると示唆された。（共同研究のため抽出不可能）
36. ルールが明確ではない「非道徳的行動」に対する不快感についてー小学生に対する調査からー	単	2007年09月17日	日本教育心理学会第49回大会	文教大学（埼玉）にて、ポスター発表（PG031、論文集P.657）を行った。 小学生を対象に、ルールが明確には定められていないが一般的にはよくないとされている行動（道徳的行動）に対する質問紙調査を行った。その結果、全体的に男子よりも女子のほうが非道徳的行動を行った自身に対し、不快感を持つことが示唆された。また、小学校高学年は非道徳的行動を許容し始め、許容する行動の種類が男女で異なることも示唆された。
37. 慣習的な行動違反をした時の不快感と他者感情の捉え方と社会的連帯感の関係ー小学2・4・6年生への調査よりー	単	2007年08月04日	道徳性発達実践学会	神戸親和女子大学（神戸）にて、口頭発表（研究発表1、13：00-13：30）を行った。 ルールが明確ではない行動に対する違反を取り上げ、違反した時に自分自身に対して不快感を持つかどうかを調べ、その傾向が他者への感情に対する捉え方や社会的連帯感と関係しているか検討した。調査の結果、連帯感が高かったり、他者の快不快を自分のことのように感じられる子どものほうが、迷惑行為などへの不快感が高かった。従って、「ルールだからダメ」と教える方法に加え、社会や人との繋がりを実感させる方法が非道徳的行動の抑制には有効であると示唆された。
38. 「道徳的行動」の生成機序の解明ー行動を抑制する要因からー	単	2007年03月25日	日本発達心理学会第18回大会	埼玉大学（埼玉）にて、ポスター発表（ポスターPB142、論文集P.566）を行った。 本研究では、ルールや罰則の有無など外的な抑制要因ではなく、「道徳性がない行動（電車に乗るとき順番を抜かした等）」に対する個人内の抑制要因について行動との関係を調べるため、大学生に質問紙調査を実施した。その結果、自身の道徳性がない行動への不快感と、自分と社会との連帯感に繋がりがみられ、社会的な連帯感が抑制要因となる可能性が示唆された。
39. ルールはないが良くないとされる事柄に対する大学生の意識	単	2006年03月20日	日本発達心理学会第17回大会	九州大学（福岡）にて、ポスター発表（ポスターPA054、発表論文集P.279）を行った。 明らかなルール違反ではないものの人を不快にさせられると思われる事柄について、大学生がどのような事柄を悪い（または不快）と感じるのかを調査し、悪い（不快）ものからそうでないと思われるものについて程度の評定が可能なかを検討した。その結果、他者への影響が明らかな事柄は悪く不快だが、そうでない場合はどちらにも思われにくいことが示唆された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
40. 映画とドラマにみられる日本人の 子どもの表情	共	2004年7月18 日	日本社会心理学会第45 回	寺井朋子・米谷淳 北星学園大学（大阪）にて、ポスター発表(257、 論文集P. 558)を行った。 子どもの表情や表示規則に関して、映画やドラマ を用いて、日本人の子どもの表情特徴の検討を行っ た。その結果、大人は一度に多くのAU(Action Unit) を表出するが、子どものほうが様々なAUを表出する ことが示唆された。子どもは大人より多種類のAUを 表出するが成長に伴い表れなくなり、ある特定の感 情時のみの表出など規則化の可能性が考えられる。 (共同研究のため抽出不可能)
41. 日本人の表情に関する研究—映画 とドラマにみられる小・中学生の 表情と表示規則—	共	2004年09月1 2日	日本心理学会第68回大 会	寺井朋子・米谷淳 関西大学（大阪）にて、ポスター発表(ポスター1A M069、発表論文集P587)を行った。 10本の邦画（5本小学生、5本中学生）から表情が はっきり映っており文脈が分かりやすい提示刺激を 抽出し、男女大学生124名に対して登場人物がどのよ うな感情であると思うか評定実験を行った。評定結 果で選ばれた場面について、FACS(Facial Action Co ding System)を用いて表情を分析した。その結果、 負の感情の時には小中学生共に表示規則に従う表情 がみられたが、中学生では幸福の感情の時もストレ ートに表現しないことが多く、発達の変化が明らか となった。（共同研究のため抽出不可能）
42. Display rules of children obse rved in Japanese TV dramas and movies.	共	2004年08月	28th International Co ngress of Psychology (ICP2004)	Terai Tomoko, & Maiya Kiyoshi 国際心理学会（北京）にて、ポスター発表(No. 40 28. 26)を行った。 10本の邦画（5本小学生、5本中学生）から86場面1 22表情を抽出した。それを大学生に提示し、評定実 験で80%以上の人が一致した表情は68場面98表情で あった。これらの表情を分析したところ、基本表情 のAU(Action Unit)と完全に一致する表情は小学生の 3場面3表情（すべて驚き）のみであった。さらに、 大人は子どもよりも一度に表出されるAUが多いもの 、子どもの方が大人よりも様々なAUを表出するこ とが示唆された。（共同研究のため抽出不可能）
43. 子どもの表情と表示規則—映画と ドラマを用いた母親へのインタビ ューをもとに—	共	2004年05月1 6日	日本感情心理学会第12 回大会	寺井朋子・米谷淳 同志社大学（京都）にて口頭発表(OE-2、プログラ ム・予稿集P. 19)を行った。本研究では、映画やドラ マの様々な場面で表出される子どもの表情サンプル で表示規則の点から検討し、実際の子どもの表情と の関係を調べた。大学生を対象に評定実験を行い、 中学生を持つ母親4名に得られた表情を示してインタ ビューを行うと、その表情が母親らの子どもにもみ られることがわかった。また、規則表示に従う場面 は小・中学生で異なった。（共同研究のため抽出不 可能）
44. 映画とドラマに見られる子どもの 表情	単	2003年12月1 3日	神戸大学国際文化学会 第11回研究発表大会	神戸大学国際文化学会（神戸大学）にて、口頭発表 を行った。
45. 映画「小さな恋のメロディ」にお ける子どもの表情	共	2003年09月1 6日	日本社会心理学会第44 回大会	寺井朋子・米谷淳 東洋大学（東京）にて、ポスター発表(ポスターP- 1-22、論文集P. 356)を行った。 映画「小さな恋のメロディ」を用いて3人の子ども （主人公）について、53場面123表情をFACS(Facial Action Coding System)を用いて分析した。その結果 から、子どもにおいては基本表情はほとんど見られ ず、表示規則を用いられる場面であっても大人に比 べて表情の個人差が大きいことが示唆された。（共 同研究のため抽出不可能）
46. 日本人の表情に関する研究—テレ ビでみられる子どもの表情—	共	2003年09月1 3日	日本心理学会第67回大 会	寺井朋子・米谷淳 東京大学（東京）にて、ポスター発表(ポスター1P M043、発表論文集P. 135)を行った。 日本の子どもの日常における対人コミュニケーション 場面での表情の検討を目的とし、日本のテレビ 番組での子どもの表情を調べた。その結果、基本表 情は種類・頻度共にわずかで、嫌悪、恐れ、軽蔑の 基本表情はほとんどなかった。また、怒りの表情で は眉寄せはほとんど含まれず、身体動作は怒りより も幸福の場面で多いことが明らかとなった。（共同 研究のため抽出不可能）
47. 日本人の表情に関する研究—「中 学生日記」にみられる表情の分析 —	共	2003年08月1 日	日本感情心理学会第11 回大会	寺井朋子・米谷淳 聖心女子大学（東京）にて口頭発表(B-5、プログ ラム・予稿集P. 19)を行った。 日本人の子どもが普段どのような表情をするのか 調べることを目的とし、テレビドラマの中学生日記 を用いて調査した。まず、VTRから感情の表出がみら れ、かつ表情が分析できる場面を取り出し大学生に 呈示した。文脈の理解度や登場人物の子供の感情等 を質問し、その中から子どもの感情について80%以

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
				上の一致がみられた場面をFACSを用いて分析した。 (共同研究のため抽出不可能)
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 中学生における日常生活満足度と善悪判断に関する短期縦断的研究	単	2013年07月20日	人間発達・教育研究会	神戸市立総合福祉センター（兵庫）にて、話題提供を行った。 中国地方の公立中学校で行われた春と冬の2回のアンケート結果の中から、特に成績の関連について分析した。特に1年生では、男女ともに、春の時点の満足感が冬の成績に影響することが明らかとなり、入学直後の安心感が様々な側面に影響を与える可能性が示された。
2. 非道徳的行動に対する善悪判断の分類—小学3年生～6年生とその保護者への調査より—	単	2010年12月04日	道徳性発達研究会	神戸親和女子大学（兵庫）にて、話題提供を行った。公立小学校1校の3年生～6年生の児童とその保護者に対して質問紙調査を行い、248組496名から回答を得られた。その結果、マナー違反などの”社会的不適切行動”は保護者の方が子どもよりも「良くない」と判断をしていた。しかし、困っている人をほっておくなど”人間的不適切行動”の方が「良くない」と判断するのは保護者も子どもも同じであることが明らかとなった。
3. 道徳性における感覚的側面について	単	2009年10月24日	道徳性発達研究会	神戸親和女子大学（兵庫）にて、話題提供を行った。日常生活の中では「悪い」と思いながらも行ってしまっているのが、「判断」ができていないのに「行動」してしまうのはなぜかということについて考えた。ここでは、小学生と大学生のアンケート結果をもとに、どのようなものが「判断」と「行動」の間に差があるのかについて議論した。
4. 道徳性に対する感覚的側面からのアプローチ—大学生を対象とした予備的調査より—	単	2006年11月18日	道徳性発達研究会	神戸親和女子大学（兵庫）にて、話題提供を行った。道徳性と人間のコミュニケーションの関連について、仮説的モデル図を提示した。また、特殊領域理論の道徳領域と慣習領域を紹介し、それに基づいた女子大学生357名への調査結果を発表した。
6. 研究費の取得状況				
1. 道徳的直感と学校ソーシャルキャピタルが大学生の学校適応に果たす役割の日米比較研究	単	2018年06月	平成30年度 武庫川女子大学 科学研究費補助学内奨励金	学校適応を高める要因を明らかにするために、日米の大学生を対象とした予備調査を行う。また、これまでに蓄積されたデータを論文化することも目的としている。
2. 基盤研究(C) 道徳的直感が判断に及ぼす影響と学校適応に関する日米比較研究	共	2015年04月	2015年～2017年度（3年間） 文部科学省・日本学術振興会 科学研究費助成事業（科研費）	寺井朋子（研究代表者） 高井弘弥・河合優年（共同研究者） 日米ともに子どもの学校適応は大きな問題となっており、学校適応を高める要因を明らかにし、個別の児童生徒に応じた対応方法を検討することが必要となっている。 本研究では、ルールが明確な行動に対しては道徳的判断に影響される可能性があること、適応—不適応は長期的に見なければならないこと、子どもが生活している学校文化内のコミュニケーションスタイルが学校適応と関係することなどが示唆された。
3. 道徳的判断における直感的な処理プロセスに関する研究	単	2011年07月	平成23年度 武庫川女子大学 科学研究費補助学内奨励金	本研究は、非道徳的行動の制御要因として、従来研究されてきた「判断」と新しい概念である「感覚」を仮定し、これらの役割を明らかにしようと試みるものである。ここでは、科研費審査結果をもとにして研究を段階的に行うこととした。そのため、非道徳的行動と仮説的な2つの制御要因の関係のみ検討するとして申請した。質問紙調査の結果は学内科研報告書にて報告を行った。
4. 非道徳的行動の制御における感覚的要因とその年齢的变化の検討	単	2009年07月	財団法人 小平記念日立教育振興財団 日立家庭教育研究所	近年問題となっているモラルの低下を防ぐには、学校教育だけではなく家庭と学校の連携が必要である。ここでは、小学生2年生～6年生の児童とその保護者に質問紙調査を行い、児童の非道徳的行動への意識と保護者のしつけ観などを調べるという内容で申請した。採択後の研究内容については、家庭教育研究所紀要に投稿し、報告を行っている。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2004年02月13日	日本発達心理学会
2. 2004年02月11日	日本教育心理学会
3. 2002年04月01日	日本心理学会